

令和元年度

学生によるオレンジリボン運動

愛知県立大学 実施報告書



実施主体 愛知県立大学村田ゼミ

実施内容 地域への啓発を目指した学内での子ども虐待防止活動

①事前に取り組んだ内容

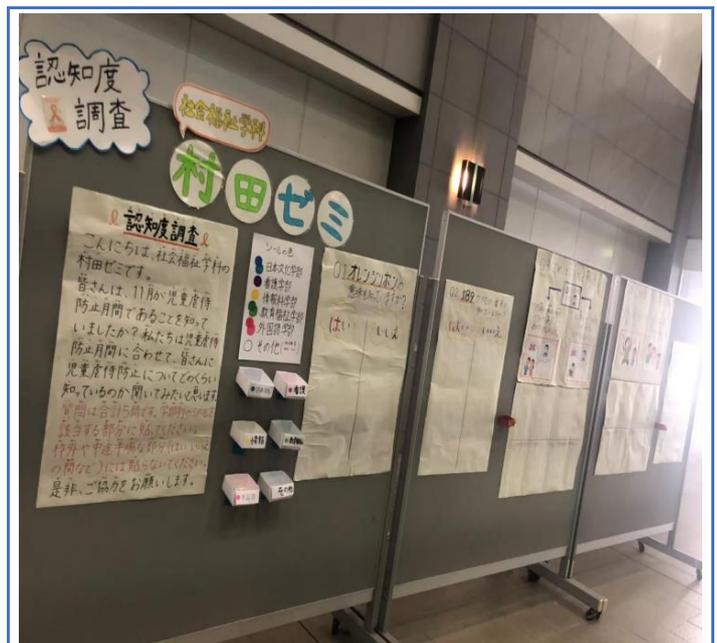
①授業やゼミの中で子ども虐待について学び、またその対応や対策を理解する。②乳児院、児童養護施設、児童自立支援施設への訪問を通して虐待が子どもの心身へ与える影響及び、保護後の子どもの暮らしについて学ぶ。③配布物となるオレンジリボンの描かれた缶バッジとしおりの製作。④オリジナルのポスターなど掲示物の内容を検討し、製作する。⑤虐待による死亡事例についてゼミ内での意見交換。⑥子ども虐待認知度調査についての内容の検討。⑦図書館での展示図書の検討。

②実施期間に取り組んだ具体的内容

- ・製作したオレンジリボン運動啓発ポスターを学内数カ所に掲示。
- ・学内職員へのオレンジリボンの配布。
- ・製作したオレンジリボンの描かれた缶バッジを学内及び大学祭で配布。
- ・社会福祉学科1年生を対象とした学内学習会を実施し、子ども虐待防止及びオレンジリボン運動の啓発並びに虐待による死亡事例の検討。また、受講学生への意見収集の実施による、学習会を通じた意識の変化についての理解。
- ・子ども虐待認知度調査を実施し、その結果の集計と考察。
- ・大学祭でのしおり作りのブースの出店。及び、来校者向けのオレンジリボン運動・子ども虐待防止の啓発、子ども虐待認知度調査の実施。
- ・子ども虐待に沿ったテーマの図書やオレンジリボン運動の啓発に関するパネルの展示。

③オレンジリボン運動を終えて…

〈子ども虐待認知度調査〉
オレンジリボンや189の意味を知っている割合は教育福祉学部が最も高く、他学部と大きな差が見られた。また地域住民の認知度も低いということが明らかになり、オレンジリボン運動(以下、本運動とする)の周知の必要性を改めて実感した。ネグレクトや心理的虐待に関する事例を用いた設問では、設問によって虐待である/虐待でないという回答の割合に差があった。このことから、その判断の背景には自分の育ちなど個人的な要因があるためにはばらつきが出たのではないかと考えた。



虐待通告に関する設問では、「迷うけど通告する/しない」の2択の合計が約7割で、通告に対して迷いが生じる人が多いことが明らかになった。

〈学内学習会〉

事例検討では、個人の生活背景から生み出される価値観によって、「虐待かもしれない…」と判断できるかどうかが決まると考えられた。また、通告についてのアンケート調査では、もし虐待ではなかった場合にその家族に変な偏見が持たれてしまうのではないかという意見があり、通告によってもたらされる影響力への不安から通告のためらいが生じていると考えられた。通告しないと答えていた人は、学習会後の感想で「地域の目」の大切さや通告の必要性を実感したと答えており、意識の変化が見られたことから学習会の効果があったと思われる。

〈大学祭〉

大学祭において本運動に関する企画として、子ども虐待認知度調査や本運動の起源についての掲示を行った。また、来校した子どもたちと一緒にオリジナルのしおりを作り、完成したしおりを持ち帰ってもらうことで、子どもたちへの啓発にも努めた。少なくとも、来校した約100名以上の親子への啓発に取り組むことができた。来校者に向けて、オレンジリボンや子ども虐待防止への関心を深める機会を提供したことで、地域住民に向けた本運動の啓発をすることができたと思われる。オレンジリボンを目にする機会を増やしていくことが、本運動につながり、さらには子ども虐待防止へとつながっていくと考えられた。

〈啓発に向けて意識したポイント〉

活動の幅を広げるために、大学内図書館での子ども虐待に関する図書の紹介・展示や大学祭でのしおり作りなど新しい活動を取り入れ、他学部の学生や地域住民などより多くの人に働きかけができるようにした。

